外科矯正治療の術後成績と患者の 満足度の関連性について

永 金 則 子 岩 見 優 子 井 藤 一 江
下 田 美 和 八 塚 尋 子 梶 山 佳 代
天 野 有 希 丹 根 一 夫

Patient's Recognition of Improvement in Facial Profile due to Orthognathic Surgery

NORIKO NAGAKANE, YUKO IWAMI-MORIMOTO, KAZUE ITO,
MIWA SHIMODA, HIROKO YATSUZUKA, KAYO KAJIYAMA,
YUKI AMANO and KAZUO TANNE

Abstract : This study was designed to investigate the patient's recognition of changes in facial profile due to orthognathic surgery. The results of questionnaires were summarized and analyzed in relation to cephalometric data.

The subjects consisted of forty-three posttreatment patients (13 males and 30 females) with mandibular prognathism, who had undergone orthognathic surgery at Hiroshima University Dental Hospital. In this study, patient's recognition of improvement in facial profile was summarized in relation to morphologic changes associated with orthognathic surgery by means of Spearman's correlation analysis.

The results were as follows :

1. Before treatment, eighty-eight percent of patients were anxious about disharmony of the facial profiles, and the degree of anxiousness was severe in half of them. As for facial areas, the lower lip and chin were their greatest concern.

2. After treatment, eighty-four percent of patients recognized improvement in facial profile, and sixty-three percent of patients assessed that their profiles were improved more substantially than expected before treatment. As for facial parts, more than seventy percent of patients mainly recognized improvement in lower lip and chin.

3. The patient's recognition of improvement in facial profile, especially chin, exhibited a significantly positive correlation with the amount of mandibular setback during treatment.

These results suggested that most patients assessed that improvement in facial profile was achieved by orthognathic surgery. It is shown that their recognition of improvement in their facial profiles is significantly correlated with the amount of mandibular setback.

Key words : orthognathic surgery (顎矯正手術), questionnaire (質問紙法), facial profile (顔貌)

[Received Nov. 30, 1995]

緒 言

近年、顎矯正手術の進歩に伴い、顎変形症患者の顔貌ならびに咬合の不調和を大きく改善することが可能となった。このような治療による顎顔面骨格の変化とこれに伴う顔貌の変化は、患者の心理に大きな影響を与える^{1,2)}ことから、顎矯正手術による顔貌の変化を患者自身がどのように認識しているかを正しく把握しておくことが重要である。

顎矯正手術の結果に関する患者の認識について、山田³⁻⁶⁾は下顎前突患者を対象に質問紙法調査を行い、顔面変形の高度な患者ほど術後に情緒不安が減少し、行動パターンが外向性へと変化する傾向があるものの、術前の顔面変形の程度と手術前後の顔貌に対する自己評価に有意の関連性はなかったと報告している。しかし、手術による顎顔面形態や顔貌の変化の程度と、それに対する患者の認識との関連性についての詳細な検討はなされていない。

本研究では、顎矯正手術を適用した下顎前突患者に対する質問紙法調査により、手術による顔貌の変化についての患者自身の認識を把握し、さらにこれらの結果と手術による顎顔面形態の変化との関連性を明らかにすることを目的とした。

資料および方法

I. 研究対象

広島大学歯学部附属病院矯正科にて、顎矯正手術のための術前・術後矯正治療を受けた患者のうち、術後矯正治療が終了した患者120名に質問紙を郵送した。回答を得た55名(回答率46%)のうち、著しい開咬、顎偏位、および口唇裂口蓋裂などを伴う患者を除いた下顎前突患者43名(男性13名、女性30名)を研究対象とした。対象症例の手術時年齢は平均20歳9カ月(14歳3カ月~29歳0カ月)、調査時年齢は平均25歳5カ月(18歳7カ月~34歳6カ月)で、手術後平均4年8カ月(9カ月~11年1カ月)が経過していた。

質問紙の内容の一部を Table 1 に示す。質問紙の回答に際しては、「はい、いいえ」の間を7段階に分け、そのひとつを選ばせることにより患者

の認識の程度を評価した (Fig. 1)。また、選択肢を用意した質問では複数回答を許容した。さらに、質問内容に応じて患者の意見を具体的に記入する欄を用意した。

研究資料としては、対象症例の初診時および治療終了時における側面頭部X線規格写真を用いた。

II. 分析方法

1. 質問紙法調査の集計

各項目について回答の度数を算出するとともに、その割合を図示した。

2. 側面頭部X線規格写真分析 (Fig. 2)

下顎骨に関する項目として、1) $\angle$ SNB 2) $\angle$ ANB 3) $\angle$ SNPog 4) Ans-Me 5) Me(X) 6) Me(Y) の6項目の初診時および治療終了時の値と術前後の変化量を計測した。Meについては、フランクフルト平面をX軸とし、これに直交しS点を通る直線をY軸とした基準座標系を設定し、そのX, Y座標値であるMe(X), Me(Y)を計測した。なお、Y軸より前方、X軸より下方を正の値とした。また、すべての計測値について、治療後の値と初診時の値の差をその変化量とした。

3. 質問紙法調査集計結果と側面頭部X線規格写真分析結果との間の関連性の検討

質問紙法調査集計結果のうち、顔貌に関する項目の調査結果と側面頭部X線規格写真分析結果との間で、Spearman の順位相関分析を行った。分析に際しては、7段階の質問紙法調査回答結果をカテゴリーデータとして用い、Fig. 1に示す7段階スケールの左側(はい、良い)から右側(いいえ、悪い)に向かって1, 2, 3...と昇べき順に番号を付与した。設定したカテゴリーデータと、治療前後の頭部X線規格写真分析結果およびその変化量との間で相関の有無を検討した。

結 果

I. 質問紙法調査結果

1. 治療前の状態に関する結果

1) 治療前の顔貌に対する認識

治療前の自分の顔貌が気になっていたかという質問に対して、患者の88%が「気になっていた」と答え、そのうちの約半数は「非常に気になっていた」と回答していた。男女別にみると、男性で

Table 1 A list of questionnaires

1. When did you notice the disharmony of facial profile?
(自分の顔の形が気になり出したのはいつ頃からですか?)

Yes No

2. Did you expect the improvement in facial profile after treatment
(治療前, 自分の顔の形が気になっていましたか?)

Yes No

3. How much degree did you notice the disharmony of facial profile before treatment?
(顔を正面と横から見て, どの部分がどの程度気になっていたか, 答えて下さい。)

frontal facial profile	midface	Good	Bad
	mandibular gonion
	lips
	chin
	others ()

lateral facial profile	nose	Good	Bad
	upper lip
	lower lip
	chin
	others ()

4. Did you expect the improvement in facial profile after treatment?
(治療前, 手術を受けることによって, 顔の形が良くなると期待していましたか?)

Yes No

5. Do you notice the improvement in facial profile after treatment?
(治療を受けた後, 自分の顔貌が良くなったと思いますか?)

Yes No

6. How much degree do you evaluate the improvement in facial profile after treatment?
(顔を正面と横から見て, どの部分がどの程度良くなったと思うか, 答えて下さい。)

frontal facial profile	midface	Good	Bad
	mandibular gonion
	lips
	chin
	others ()

lateral facial profile	nose	Good	Bad
	upper lip
	lower lip
	chin
	others ()

7. Do you recognize the improvement in facial profile more than expected before treatment?
(現在の顔の形は, 治療前に期待していたよりも良くなりましたか?)

Yes No

8. Do you think if your character has been changed after treatment?
(手術前と比べて, 自分の性格が変わったと思いますか?)

Yes No

How is the change? (multiple choice is available)
(性格が変わったと回答された方は, どのように変わったと思いますか?)

9. Do you want to keep your experience of the treatment secret from others?
(手術をしたことを, 人に知られたくないですか?)

Yes No

10. Are you satisfied with the results of treatment?
(治療を受けて良かったと思いますか?)

Yes No

Fig. 1 Quantification of patient's recognition to be used as categories ranging from 1 to 7

Fig. 2 X-Y coordinate system and landmarks for lateral cephalometric analysis

は13名全員が「気になっていた」と回答していた。女性では「気になっていた」と回答したのが83% (25名)で、「どちらともいえない」、「気にならなかった」がそれぞれ14% (4名), 3% (1名)であった (Fig. 3)。

自分の顔貌が気になり始めた時期は、小学校高学年、高等学校時がともに30%と最も多く、ついで中学校時が19%となっていた。男女別にみると、男性では高等学校時が46%と最も多く、ついで中学校時が23%であった。一方、女性では、小学校高学年が36%で最も多く、男性よりもかなり早い時期から顔貌の不調和を気にし始めていたことが明らかとなった (Fig. 4)。

手術前の自分の顔貌を部位別に評価した結果を Fig. 5に示す。正貌に関して、「悪い」と回答した患者の割合は、顔の中央部や下顎角部についてはそれぞれ28%, 26%と少なかったのに対し、口唇では65%, オトガイ部では65%と高い割合を示した。具体的には、「顔が長く、冷たい感じ」、「顔

の中で顎の占める割合が大きい」、「下唇の下が膨れている」、「顎が尖っている」、「顎が長い」、「唇が薄い」などの回答があった。

また、側貌に関して、鼻と上唇部では、「どちらともいえない」もしくは無回答が合わせて60%以上と大きな割合を示した。一方、下唇とオトガイ部では「悪い」と回答した患者はそれぞれ86%, 79%と、非常に高い割合を示した。具体的には、「顎が出ている」、「顎が長い」、「凹凸がなく平らかな顔の線」などの回答が見られた。

2) 手術に対する期待

手術によって顔貌が良くなると期待していたかという質問に対して、93%の患者が「期待していた」と回答した。男女別では、男性は全員が「期待していた」と回答したのに対して、女性では87%が「期待していた」とし、「期待していなかった」としたものが13% (3名)であった (Fig. 6)。顔貌が良くなることを期待していなかった3名のうち、2名は治療前に顔貌の不調和を気にしていなかった患者であった。残る1名は、治療前に顔貌の不調和を気にしていたものの、「顔が変わることを、周囲の人がどう思うか不安である。美容整形をしたと思われたくない。」と答えていた。

2. 治療後の状態に関する結果

1) 治療後の顔貌に対する認識

治療後の顔貌が良くなったかという質問に対して、患者の84%が「良くなった」と回答していた。男女別では、男性は全員が「良くなった」と回答していたが、女性では「良くなった」が77%, 「どちらともいえない」が20% (6名)であった (Fig. 7)。「どちらともいえない」と回答した6名のうち4名は、治療前に自分の顔貌が「気にならない」、または「どちらともいえない」と回答しており、治療による顔貌の変化を強くは希望しなかった。残る2名は、「治療により顔貌が良くなったが、期待以下であった」、「期待以上に顔貌が良くなったものの、治療後の顔貌においても顔が長い」と回答し、治療結果に十分満足していないことが示された。

手術後の顔貌を部位別に評価した結果を Fig. 8に示す。正貌に関して、顔の中央部や下顎角部では「どちらともいえない」あるいは無回答とし

Fig. 3 When did you notice the disharmony of facial profile?

Fig. 4 Did you notice the disharmony of facial profile before treatment?

た患者の割合が、それぞれ84%、65%と最も多かった。これに対して、口唇では58%、オトガイ部では63%が「良くなった」と回答しており、顔貌の改善を十分認識している患者の割合が高くなっていた。正貌の変化について、具体的には、「顔が丸くなった」、「印象がやわらかくなった」、「唇の形が良くなった」などの回答が見られた。

側貌に関しては、鼻と上唇部では「どちらともいえない」もしくは無回答とした患者が、それぞ

れ86%、72%と多く、改善の認識が低かった。一方、下唇とオトガイ部では、「良くなった」と回答した患者はそれぞれ74%、72%で、かつ「非常に良くなった」とした回答が多く見られた。側貌の変化について、具体的には、「顎がひっこんだ」、「顎の線がきれいになった」、「上下唇のバランスが良くなった」などの回答があった。

顔貌が治療前に期待していたよりも良くなったかという質問に対して、63%の患者が「期待していたよりも良くなった」と回答していた (Fig. 9)。「期待していたより良くなかった」としたものは約12% (5名) であった。また、治療後の顔貌改善の認識 (Fig. 7) をみると、期待以下であった5名のうち4名は、「期待したよりは良くなかったが特別不満はない」、「良くなったのは確かだが、完全には治らなかった」と、期待していたより良くないとしたものの、「手術により顔貌が良くなった」、「治療を受けて良かった」と回答しており、治療後に顔貌が「良くなった」と回答していた。残る1名は、治療前の顔貌についても、顔貌

lateral facial profile

Fig. 5 How much degree did you notice the disharmony of facial profile before treatment?

Fig. 6 Did you expect the improvement in facial profile after treatment?

の改善 (Fig. 7) についても「どちらともいえない」と回答しており, もともと顔貌の不調和を主訴とはしておらず, 顔貌の改善を希望していなかったためと考えられる。一方, 期待どおりまたは期待以上に顔貌が改善したとしたものの, 治療後の顔貌について「どちらともいえない」としたものが5名見られた。

2) 手術後の心理状態

Fig. 7 Do you notice the improvement in facial profile after treatment?

frontal facial profile

lateral facial profile

Fig. 8 How much degree do you evaluate the improvement in facial profile after treatment?

手術をしたことを他人に知られたくないかという質問に対して、「知られたくない」と回答した患者と、「知られても良い」と回答した患者は, いずれも44%と同じ割合を示した (Fig. 10)。

手術前と比べて自分の性格が変わったと思うかという質問に対して, 51%の患者が「変わった」と回答していた。どのように変わったかという問

Fig. 9 Do you recognize the improvement in facial profile more than expected before treatment?

Fig. 10 Do you want to keep your experience of the treatment secret from others

The number in this diagram denote the number of subject

Fig. 11 Do you think if your character has been changed after treatment? How is the change? (multiple choice is available)

いには、「人前に出ても恥ずかしくなくなった」、「自信がもてるようになった」、「明るくなった」、「積極的になった」など、外向性の変化が挙げられており、内向性の変化を挙げた患者はいなかった (Fig. 11)。

3. 治療の総合評価

治療を受けて良かったという質問に対しては、95%の患者が「治療を受けて良かった」と回答し

ていた。残りの5% (2名) は「どちらともいえない」としていた (Fig. 12)。この2名は、手術の必要があることを知ったとき「仕方ない」、「不安だった」と感じており、積極的に治療を希望していなかった。また、治療全体について「想像していたよりもつらかった」と答えており、顔貌の改善を認識していたものの総合評価が低かったものと考えられる。

Fig. 12 Are you satisfied with the results of treatment?

II. 質問紙法調査結果と顎顔面形態の変化との関連性

初診時と治療終了時の側面頭部X線規格写真の分析結果を Table 2 に示す。初診時と最終観察時を比較すると、Me は後上方への位置変化を示し、その変化量は後方へ平均9.2mm, 上方へ平均1.4mm であった。その結果、 $\angle ANB$ は平均 -5.0 度から -0.6 度へと改善された。

質問紙法調査の集計結果と側面頭部X線規格写真分析結果の関連性について、Spearman の順位相関分析の結果を Table 3 に示す。

顔貌が気に入り始めた時期や顔貌が気になっていた程度と、初診時の顎顔面形態の不調和の程度との間に相関は見られなかった。

治療後に自分の顔貌が良くなったと思うか、という設問に対する回答と Me(X) および $\angle SNPog$ の変化量との間に有意の正の相関が、Me(Y) と Ans-Me の変化量との間に有意の負の相関が明らかとなった。また、治療後の側貌におけるオトガイ部の位置に関する自己評価結果は、Me(X)

の変化量との間に有意の正の相関、Me(Y) の変化量と術後の $\angle ANB$ との間に有意の負の相関を示した。さらに、側貌におけるオトガイ部の改善の認識に対する回答は、Me(X) の変化量との間に有意の正の相関、Me(Y) の変化量との間に有意の負の相関を示した。特に、治療後の顔貌が改善されたという認識、および治療後の側貌におけるオトガイ部の評価については、いずれも Me(X) の変化量と強い正の相関を示し、オトガイ部が後下方に移動したもののほど改善を認識していた。なお、Fig. 13に示すように Me(X) と Me(Y) の間には強い負の相関が示された。

考 察

I. 調査方法について

顎顔面骨格の変形とこれによる顔貌の不調和や、治療後の顔貌の変化が患者の心理に大きく影響しているような場合、面接方式では顔貌に対する認識や心理面での変化などに関して、患者によっては正直な回答が得られないことも考えられる。このため、本研究では患者が質問者を意識することなく、面接方式に比べより正直な回答が得られると考え、郵送による質問紙法を用いた。この方法では質問内容に対する疑問や誤解が生じる可能性があるが、これを防止するため回答方法については具体例を示し、顔貌についての質問には図を添付した。また、より詳細な患者の意見を得るために自由記入欄を設けた。

また、手術による顎顔面形態の変化と患者の認識との関連性を検討するため、回答を7段階のカテゴリーデータに変換した。このような数値化により、質問紙法調査結果のような質的データと数量データの関係を分析することが可能となり、異

Table 2 Means and standard deviations of cephalometric measurement

	before treatment	after treatment	changes during treatment
$\angle SNB$ ($^{\circ}$)	84.6 ± 4.1	80.5 ± 4.5	-4.0 ± 2.0
$\angle ANB$ ($^{\circ}$)	-5.0 ± 3.2	-0.6 ± 2.8	4.4 ± 2.4
$\angle SNPog$ ($^{\circ}$)	84.6 ± 4.4	80.6 ± 4.7	-4.0 ± 2.3
$\angle Ans-Me$ (mm)	78.7 ± 6.8	78.0 ± 6.1	-0.7 ± 2.8
$\angle Me(X)$ (mm)	63.8 ± 9.6	54.7 ± 8.6	-9.2 ± 4.4
$\angle Me(Y)$ (mm)	110.0 ± 9.1	108.6 ± 8.1	-1.4 ± 2.5

Table 3 Spearman's correlation coefficients between patients' recognition and cephalometric measurements.

Patients' recognition		Cephalometric measurements			∠ANB		∠SNB	
		before treatment	after treatment	changes	before treatment	after treatment	changes	changes
When did you notice the disharmony of facial profile?					0.187		0.282	
Did you notice the disharmony of facial profile before treatment?					0.043		0.244	
Do you notice the improvement in facial profile after treatment?						-0.037	0.29	-0.243
Do you recognize the improvement in facial profile before treatment?					0.126	0.072	0.098	-0.316*
Are you satisfied with the result of treatment?					-0.014	0.084	0.277	-0.024
Lateral					-0.065		-0.127	-0.195
How much degree did you notice the disharmony of the chin?				before treatment		0.032	0.187	-0.450**
Changes in self-evaluation of chin				after treatment		-0.217	-0.136	0.261
Frontal					-0.159		-0.025	0.194
How much degree did you notice the disharmony of the chin?				before treatment	0.003		-0.284	
Changes in self-evaluation of chin				after treatment		0.123	0.028	-0.150
					-0.151	-0.181	-0.135	0.111
							-0.162	0.140

∠S-N-Pog		Ans-Me		Me (X)		Me (Y)	
before treatment	after treatment	changes	before treatment	after treatment	changes	before treatment	after treatment
0.181			-0.009			0.209	
0.071			0.101			0.103	
	-0.018	0.362*		-0.007	-0.398*		0.064
0.070	0.104	-0.176	0.240	0.155	-0.217	0.154	0.075
-0.103	0.022	-0.232	0.010	-0.097	-0.219	-0.035	-0.099
-0.157			0.199			0.129	-0.223
	0.020	-0.261		0.108	-0.236		0.190
-0.151	-0.284	0.239	-0.041	0.134	0.311	-0.080	-0.348*
-0.023			0.206			0.080	
	0.058	-0.169		0.386*	-0.068		0.335
-0.056	-0.159	0.119	-0.026	-0.054	0.076	-0.160	-0.219
							0.107
							0.047

* significant at 5% level of confidence

** significant at 1% level of confidence

Fig. 13 Correlation between changes in Me (X) and Me (Y) during treatment

質なデータを用いた解析には有効な手法と考えられる。

II. 質問紙法調査集計結果について

1. 術前の状態に関する意識について

従来、下顎前突患者は機能面のみならず審美面、心理面においても大きな影響を受けていることが報告されている¹⁵⁾。今回の質問紙法調査結果においても、治療前の自分の顔貌が気になっていたものは全体の約90%ときわめて高い割合を占めていた。また、非常に気にしていたと答えたものも全体の約半数であった。多くの患者が、治療前に「人前では口元を隠していた」、「顔や口元について他人から気になることを言われた」などと答えていることから、患者の大半が顔貌の不調和に起因する強い劣等感を有していたことが示された。さらに、患者の大半が、手術を受けることによって顔貌が良くなると期待していたことから、患者が機能面の改善のみならず審美的障害を自覚し、その改善を強く望んでいたことが示された。「顔貌の不調和が気にならなかった」、または「どちらともいえない」と回答した5名は、主として咬合の改善を希望していた。

従来、男性と比べて女性の方が醜形により強い関心を持ち、その改善を望んでいると考えられていた。今回の結果においては、顔貌が気になり始めた時期が男性に比較し女性が早い傾向にあったものの、審美障害および審美面の改善を強く望んでいるものの割合は、むしろ男性が高い結果とな

った。その理由として、最近の社会環境の変化により男女の美的要求の差が不明瞭になってきたことが考えられる。また、今回対象とした患者数に男女差があるため、結論を出すには更なる検討が必要であろう。

山田⁸⁻⁹⁾が、顎矯正治療を適用した下顎前突患者を対象として行った質問紙法調査によると、下顎前突患者は術前、術後ともに口唇部を中心とした側貌、正貌に最も関心を持っているとされている。本研究においても、顔貌の部位別の評価では、口唇部およびオトガイ部に対する関心が高いという結果が得られたことから、下顎前突症の外科的矯正治療に際しては、この部位の改善が図られるような下顔面部の十分な後方移動のための計画を立案する必要がある。

2. 術後の状態に関する意識について

治療後の顔貌の変化について、橋本ら^{8,9)}は、オトガイ部の突出感が取れたという回答が最も多かったと述べている。本研究においても、正貌では患者の約60%が口唇とオトガイ部の改善を、側貌では患者の70%以上が下唇とオトガイ部の改善を挙げていた。さらに、側貌においては、非常に良くなったとしたものが多く、側貌における下唇とオトガイ部への関心がより高く、改善の認識も高いと考えられる。伊藤ら⁷⁾は、外科的矯正治療を適用した骨格性下顎前突患者に質問紙検査およびY-G検査を行い、男子では対社会的な審美性や機能のこだわりの改善が主であり、女子では自己

内面的こだわりの改善と情緒安定性の向上によるパーソナリティ変化が主であり外科矯正治療の心理学的影響には性差がある、と報告している。

本研究は質問紙法検査のみであるため、詳細な検討は困難であるが、以下のような傾向が認められた。すなわち治療後の状態については、女性より男性で「治療後、自分の顔貌が良くなった」と回答したものが多かった。しかし、期待したよりも良くなったと回答したのはむしろ女性に多かったことから、女性は顔貌の改善を十分認識しているものの、顔貌の不調和が解消した時点で美的要求がより高いレベルへ変化したものと思われる。

手術をしたことを人に知られたくないかという質問に対しては、「知られたくない」、「知られても良い」という回答がほぼ同じ割合で認められた。この結果に性差はなく、術前後の顎顔面形態との間に関連性が認められなかったことから、患者のもともと劣等意識や性格に起因した結果と考えられる。知られたくないとしたものの中に、他人に美容整形をしたと思われる不安を挙げたものが数名みられた。現在では美容整形がかなり一般的になってきつつあるが、「醜さは病気ではない」といった風潮や、親にもらった体にメスを入れることへの非難などいまだ偏見も多い。そのため、今までの劣等意識と相まって、「治療による顔貌の変化を他人がどのように受けとめるか」という新たな不安を有する場合があることを理解すべきである。

また、手術後の性格については、半数が変わったと回答し、その全てが外向性への変化であった。Crowell¹⁶⁾や Hutton¹⁷⁾の調査によると、外科的矯正治療適用患者の半数以上が性格の変化を認め、そのほとんどが内向性の性格の改善であった。また、橋本^{8,9)}は、顎変形症患者の術後の性格について、変形に由来する劣等感が少なくなったことを反映している、と述べている。本研究の結果からも、下顎前突に起因する審美障害や機能障害、さらに心理的障害が治療によって取り除かれた患者が多かったものと考えられる。

なお、患者の手術時年齢、回答時年齢、手術後経過時期の違いにより意識に差異が生じる可能性が考えられる。そこで、結果には示さなかったが、

術後の状態に関する意識についての集計結果との間の相関の有無を検討したところ有意な相関は認められなかった。したがって、手術時年齢、回答時年齢、手術後経過期間の違いによる意識の差異はないと考えられる。

Ⅲ. 顔貌の評価と顎顔面部の形態変化との関連性について

顔貌の不調和が気になりだした時期や、その程度と、治療前の側面頭部X線規格写真計測値との間に有意の相関は見られなかった。山田³⁻⁶⁾や難波^{1,2)}は、変形が高度であるからといって、患者の行動パターンにまで悪影響を及ぼすものではなく、軽度の変形の者でも強く不安を訴える者も認められた、と報告している。また、土川¹⁰⁾は、顔かたち、容姿全体にかかわる cathexis は不正の程度よりむしろ発育段階と関係し、学齢の増加に伴い cathexis は増大し、その増加率は青年前期から中期に著しくなる、と述べている。これらの所見から、顔貌の評価は非常に主観的であり、顔貌の不調和を気にし始めた時期やその程度は個々の患者の性格により異なるものと考えられた。

治療による顔貌の改善、とりわけオトガイ部の改善に対する認識は下顎骨の後方移動量と強い関連性を有し、後方移動量の大きいものほど顔貌の改善を認識しており、治療の総合評価が高くなることが明らかとなった。また、オトガイ部の前後的变化量と上下的变化量との間には負の相関が見られたが、前後的变化量の方が大きいことから、顔貌の変化にはオトガイ部の後方移動量が大きく影響していると推察された。

治療に対する総合評価については、43名中41名が治療を受けて良かったと回答していた。治療を受けて良かったか、という設問に対する回答と下顎骨の後方移動量の間にも有意の相関関係が認められたことから、下顎骨の後方移動量が大きいものほど治療に対する総合評価も高くなることが明らかとなった。評価が低かったものの中に「せっかく治療したのだから、もっと下顎を後ろに下げて欲しかった」と回答した患者が見られた。下顎骨の後方移動量は治療前の顎顔面形態や咬合状態などを考慮して、審美面および機能面の調和のとれた治療目標を設定することにより決定されるも

のである。したがって、治療方針の選択に際しては、下顎骨の後方移動量やこれに伴う顔貌の変化を含めた十分な説明を行い患者の理解を得ておくことが重要である。すなわち、外科的矯正治療の治療方針の立案に際しては、患者の十分な理解を得た上での治療方針の選択が必要であり、それによって患者にとってより満足のいく治療結果を獲得できるものと考えられる。

文 献

- 1) 難波雄哉, 岡崎 博, 鳥越雄喜: みにくさの心理と形成外科の治療との関係, (その1)醜形の精神健康に及ぼす影響, 補遺, 形成外科, 6: 263-269, 1963.
- 2) 難波雄哉, 岡崎 博, 鳥越雄喜: みにくさの心理と形成外科の治療との関係, (その2)醜形による性格偏向にたいする形成手術の効果. 形成外科, 7: 171-175, 1964.
- 3) 山田長信: 下顎前突症患者の心理学的行動パターンに関する研究—アンケート調査による—第1編, 術前, 術後自己評価の変化について. 日口外誌, 28: 562-570, 1982.
- 4) 山田長信: 下顎前突症患者の心理学的行動パターンに関する研究—アンケート調査による—第2編, 1. 顔貌の程度と術前, 術後自己評価との関連性, 2. 顔貌および咬合に関する患者評価と術者評価の相違. 日口外誌, 28: 571-583, 1982.
- 5) 山田長信: 下顎前突症患者の心理学的行動パターンに関する研究—アンケート調査による—第3編, 手術に関する患者の総合評価について. 日口外誌, 28: 584-597, 1982.
- 6) 山田長信: 下顎前突症患者の心理学的行動パターンに関する研究—アンケート調査による—第4編, アンケート調査項目の因子分析. 日口外誌, 28: 598-603, 1982.
- 7) 伊藤智恵, 山影章子, 遠藤康子, 他: 顎矯正外科治療の男女間における心理的影響の差異に関する研究. 日矯歯誌, 47: 601-611, 1988.
- 8) 橋本賢二, 塩田重利, 吉増秀實, 他: 顎変形症の手術成績の検討. 第1報—術後アンケート調査から(その1)—. 日口外誌, 35: 171-184, 1986.
- 9) 橋本賢二, 塩田重利, 吉増秀實, 他: 顎変形症の手術成績の検討. 第2報—術後アンケート調査から(その2)—. 日口外誌, 35: 185-195, 1986.
- 10) 土川登志子, 浅野央男, 大山正博, 他: 不正咬合に関わる cathexis について. 日矯歯誌, 41: 343-354, 1982.
- 11) 高口真奈美, 井藤一江, 山部耕一郎, 他: 矯正治療結果に対する患者・保護者の意識について. 日矯歯誌, 49: 454-465, 1984.
- 12) 花岡 宏, 松田哲明, 上村健太郎, 他: 骨格性反対咬合における外科矯正の治療目標. 日矯歯誌, 43: 289-324, 1984.
- 13) 伊藤 真, 熊澤康雄, 柿崎真一, 他: 顎変形症における心理的变化—アンケート調査の術前・術後比較—. 顎変形研究会会誌, 7: 96-97, 1988.
- 14) 大原久子, 寺田員人, 篠倉 均, 他: アンケート調査による外科矯正治療後の患者の心理について. 顎変形誌, 2: 32-47, 1992.
- 15) Macgregor, F. C.: Social and psychological implications of dentofacial disfigurement. Angle Orthod 40: 231-233, 1970.
- 16) Crowell, N. T., Sazima, H. J., Elder, S. T.: Survey of patients' attitudes after surgical correction of prognathism: study of 33 patients. J Oral Surg 28: 818-822, 1970.
- 17) Hutton, C. E.: Patients' evaluation of surgical correction of prognathism: survey of 32 patients. J Oral Surg 25: 225-228, 1967.
- 18) Peterson, L. J., Topazian, R. G.: Psychological considerations in corrective maxillary and midfacial surgery. J Oral Surg 34: 157-164, 1976.